

第三章 美術圖書の輸入

一 関東大震災

大正十二年九月一日、その日は朝からとても蒸し暑かった。

じっとしていても汗腺から汗が滲み出てくるようだった。それに地面から立ちのぼる水蒸気が霏になり、太陽が真赤に見えた。何か異変が起きる不吉な予感さえ覚えさせる雰囲気であった。果せるかな午前十一時五十八分、一大音響と共に関東各都市がうねりの波におしつぶされたのであった。

当時唯一の報道機関である東都新聞社のうち焼け残ったのは東京日々新聞、東京朝日新聞、報知新聞の三社であったが、そのうちでも報知新聞は、度重なるストライキにこりて、活字を地下室に保管していたから、平版や謄写版をかり出して震災第一号を印刷して、逸早く市内に配布した。内容は、震源地は相模湾内大島附近であること、食糧は府庁及び農商務省に約一か月分の米が貯蔵されていること、避暑中の両陛下、皇太子を始め各皇族には御異状がないこと、電灯は一兩日中に回復するなど、個条書にしたものであったが、民心安定には大いに役立った。東京日々新聞はくずれ散った活字をあつめるのに苦労したが、それでも午後二時ごろ号外第一号、五時ごろ第二号を発行した。それは漢字の不足をひらがなで補った珍しい記事であるから一部をこゝに掲載しておく。



関東大震災（共同提供）

権兵衛伯 危うきをのがる

内閣製造中の山本伯は当時平沼騏一郎氏と共に水交社の一室に会談中であったが初期動揺の際に大音響と共にうら二階転倒し財部氏の注意により伯はかべぎはにより震動の中絶と共にうら庭に避難した伯がかば山、山の内、平沼、たからべの諸氏と共に出でたのを見るとねづみ色のアルバカのうはぎは泥によごれ、右足をいためた為かチンバをひきつゝ顔面さうはく、し色のくちびるを堅くひきしめ苦げな微笑をもらす「おけ我はありませんでしたか」ときくと「君たちこそ、どうだハツハ、」と平気をよそほふてゐた。――

ところで陸軍測量部の調査によると、東京全市の被害面積は全面積 五一・四五八平方キロメートル 焼失面積 二二・四七五平方キロメートル 罹災率四三・六八%

全人口 二、四九九、二二七名 罹災者数 一、五八一、二二九名 罹災率 六三・三一%

で、このうち両国の被服廠跡に逃げこんだ三八、〇〇〇名が折柄捲き起った七―八〇米の旋風にあおられた火のた

め全員が焼死するという惨事が起り、聞くものゝ胸をいたくしめつけた。

被害地域は所謂下町が最も多く、家屋が倒壊した上に随所に火災が起り、これが各町に燃え拡がり更に被害を大きくした。その被害率は日本橋区の一〇〇%、神田区の九四%、京橋区の八六%、また江東地帯の本所区九五%、深川区八五%それに浅草区の九五%などは、殆んど残存家屋の無かったことを示し、帝都の主要商工業地帯は一望焼野原と化してしまった。むかし応仁の乱の時、戦火のため焼失した京の町の一角に立ち「なれや知る都は野辺の夕雲雀、上るを見ても落ちる涙」と詠じた、その歌宛らの有様であった。

被害が殆んどなかった関西地方では、大阪を始め各都市が中心となつて救援運動が起り、生活物資の徴収が始まったが、わけて食料品製造業者に対しては、その貯蔵品を強制的に買い上げ、これらを大阪の築港から二隻の巡洋艦に搭載して、急遽現地に送った。然し横浜港の岸壁はくずほれて荷揚げの用をなさず、月島もまた充分に受入れ体勢が整っていないから、折角の救援物資も十数日間そのまゝに放置され、配給が充分に行われなかった。こんなことから悪徳業者が跳梁し、物価は天井知らずに昂騰して、市民の生活をおびやかす結果となった。大正十三年五月に、三宅やす子、菊池包子、鈴木途子らが、関東震災後の東京における家具什器等の値段について調査したものが、雑誌「婦女界」に載っているが、参考のため、その主だったものを摘出してみると――

洋服タンス	六〇円〇〇銭	座布団五枚	二〇円〇〇銭
整理タンス	二六円三〇銭	コップ六個	一元〇〇銭
石油コンロ	一二円五〇銭	灰皿一個	八〇銭

石油一鎰分 三円八〇銭

果物ナイフ

九〇銭

張り板一枚 五円七〇銭

銀メツキ盆

一円五〇銭

などで、安いものでも時価の倍、高いものは八倍以上に跳ね上っていた。

日本橋の中枢部にあった丸善本社もまた罹災し大きな打撃をうけた。尤も本社はかつて火災にかゝった経験があるので、明治四十三年の新築の時には特に防火設備には充分な注意を払って設計されていた。それ故地震によって大きな被害は受けなかったが、類焼によって名物の赤煉瓦の建物を烏有に帰してしまったのである。当日は午後三時ごろ堀留附近に火災が起ったが、まさかこれが延焼してくるとは誰しも考えず、たとえ延焼してもこの堅牢な建物が焼け落ちるとは考えていなかった。そこで十数人の宿直員を残して全社員が引き上げてしまった。ところがその後火の手は益々盛んになり、翌二日の払暁には猛火に包まれて全焼してしまった。近代建築の粋を誇ったその結構も、鉄骨は飴のように曲り、くずれ落ちた煉瓦や石材は山のようにうず高く積み重なり、行くものの目を見張らしめた。四階に置かれたストック品の過重がかような惨事に拍車をかけたものと見られている。

他方神田神保町、小川町附近には高層建築物がなかったが、それだけに倒壊焼失する家屋も多く、処々にあがつた火の手は竜巻を起して神田支店を焼失せしめ、横浜支店もまた弁天通、本町、太田町方面に起きた猛火のあおりをうけて灰燼に帰した。被害総額は本支店併せて時価四〇五百万円と云われている。中でも書籍のストック品には、再び得がたい貴重な書物が多く、文化的損失は算定し難い状態であった。内田魯庵は丹念にこれを調べ上げ、「丸善再度の典籍禍」という一記録をつくっているが、それによるとキリシタン及びオランダ初期の日欧貿易に関する



大震災による社屋の被害

古書が多かったと云う。これを「丸善社史」所載の書籍から、主だったものを拾い挙げると次の如くである。

- 1) Fray Diego de San Francisco - *Relacion verdadera, y breve de la persecucion, y Martirios que padecieron por la confession de nuestra Santa Fee Catholica en Japon*,.....Manila, 1625
寛永二年版。ソテロの書いた切支丹迫害始末記でマニラとメキシコ両地で出版された珍書中の珍書。
- 2) William Wright - *A Briefe Relation of the Persecution lately made against the Catholike Christians, in the Kingdome of Iaponia*,.....London, 1619
元和五年版。英文で書かれた最初の日本記事。
- 3) Ignacio Stafford - *Historia de la celestial Vocacion, Misiones Apostolicas y gloriosa Muerte, del Padre, Marcelo Franco Mastrii*,.....Lisbona, 1639
- 4) Horatti Tursellini - *De Vita Francisci Xavierii, qui primus é Societate Iesv in India, & Iaponia Euangelium promulgavit*. Romae, 1594

- 5) Juan Francisco de San Antonio - *Chronicas de la Apostolica Provincia de S. Gregorio de Religiosos descalzos de N. S. P. S. Francisco en las Islas Philipinas, China, Japon, &c.* 3 vols., Manila, 1738-'44
元文三年ノ延享元年版。フランシスカン派の極東伝道記録。第三卷は支那及び日本に關した部分。鮮血遺書と著名な十二大聖人磔刑の精巧な図版が收められてゐる。
- 6) Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus escreverão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, desde anno de 1549. até o de 1580. 2 vols., Evora, 1598
- 7) Francisco Colin-Labor Evangelica, Ministerios Apostolicos de los obreros de la Compañia de Jesus, fundacion, y progressos de su provincia en las Islas Filiipinas. Madrid, 1663
- 8) Buxeda de Leyva-Historia del reyno de Iapon,.....Caragoça, 1591
- 9) Guido Gualtieri-Relationi della Venuta de gli Ambasciatori Giaponesi à Roma, sino alla Partita di Lisbona..... Roma, Francesco Zannetti, 1586
- 10) Pr. Fr. Melchor Oyanguren-Arte de la Lengua Iapona,..... Mexico, 1738
- 11) C. P. Thunberg-Resa uti Europa, Africa, Asia, fortrattad aren 1770-'79. 4 vols., Upsala, 1788-'93
その他耶蘇会十種信五十餘冊中の貴重本として
- 12) Ferreira-Relatione delle persecuzioni mosse contro la fede di Christo in varii regni del Giappone ne gl' Anni MDCXXVIII. MDCXXIX. e MDCXXX. Roma, 1635
- 13) Organtino-Lettere del Giappone dell'anno M.D.LXXVII. Scritte dalli reverendi Padri della Compagnia di Giesu. Roma, 1579
- 14) Luigi Froes-Avvisi del Giappone.....del LXXXIII, et LXXXIV.....lettere della Compagnia di Giesu.

Venetia, 1586

東洋関係の書籍

15) The Chinese Repository. 20 vols., Canton, Hongkong, 1832-'51

16) Gaspar Castner-Relatio Sepultvrae Magno Orientis Apostolo S. Francisco Xaverio erectae in Insula Sanciano anno aeculari MDCC. Peking, 1700

17) Henry H. Howorth-History of the Mongols from the 9th to the 19th Century. 4 vols., London, 1876-88

18) C. d'Ohsson-Histoire des Mongols, depuis Tchinguiz-Khan, jusqu'a Timour Bey ou Tamerlan. 4 vols., Amsterdam, 1834-'52

19) James Legge-The Chinese Classics. 5 vols. in 8 books, Hongkong, 1861-'72
無字の語や平語の貴重本

20) Joseph Etienne Kowalewski-Dictionnaire Mongol-Russe-Français, dédié à Sa Majesté l'Empereur de Toutes les Russies. 3 vols., Kasan, 1844-'49

21) Ivan Illich Zakharov-Polnyi man'jursko-russkii slovar. St. Petersburg, 1875
旅行記・探検記

22) Capt. Adam Juan von Krusenstern-Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805, und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadeshta und Newa……. 2 vols. with Atlas-vol., St. Petersburg, 1810-'12

23) G. H. von Langsdorff-Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807. 4 vols.

2 texts, 2 atlas, Frankfurt am Mayn, 1812

動植物図鑑
ちりしん

- 24) Sir Joseph Dalton Hooker-Icones Plantarum, or Figures, with brief descriptive characters and remarks of new or rare plants, selected from the Author's Herbarium. 31 vols. and Index, London, 1837-1922

- 25) Sir J. D. Hooker-The Botany of Antarctic Voyage of H. M. Discovery-ships "Erebus", and "Terror" in the years 1839-'43, under Capt. Sir J. C. Ross. (Flora Antarctica). 6 vols., London, 1847-'60

- 26) R. H. Beddome-Flora Sylvatica for Southern India;.....Containing Quarto plates of all the principal Timber Trees in Southern India and Ceylon. 2 vols., Madras, 1869-'73

- 27) John Ed. Holbrook-North American Herpetology. 5 vols., Philadelphia, 1836-'43

- 28) H. E. Dresser & R. B. Sharpe-A History of Birds of Europe. 9 vols., London, 1871-'96

- 29) P. Bleeker-Atlas ichthyologique des Indes Orientales Néerlandaises. I-IX, 36 parts, Amsterdam, 1862-'78

- 30) M. E. Bloch-Allgemeine Naturgeschichte der Fische. 12 vols. with 4 Plate-vols., Berlin, 1782-'95

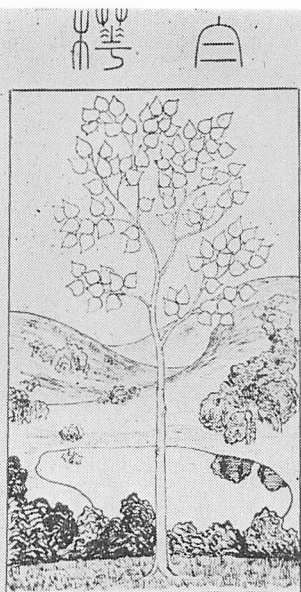
五十部限定版
ちりしんの美術書

- 31) Charles Baudelaire-"Les Fleurs du Mal". Illustrés par Rodin. Lyon et Paris, 1918

二 「白樺」と丸善

丸善の赤煉瓦館時代は、明治四十三年から、大正十二年までということになるが、いみじくもまた「白樺」の生命もこれに符節して、震災と共に終止符を打っているのである。運命論者ならでも、この両者に何かしら因果関係がありはしまいかと考えるのも無理からぬことだろう。ところがそれどころかこの両者には全く唇齒輔車の関係があったのである。白樺派の人達は丸善を利用し、丸善もまた白樺派の御用を聞きながら、PRを盛んに行った。文学史家が白樺派を目して、その多彩な行動が、大正年間に於ける文壇に新しい息吹きを投げかけ、大いにわが国の

明治四十三年四月十八日
大正十二年四月十八日
丸善印刷部



第壹卷第壹號

「白樺」創刊号

文化に貢献したと云うならば、丸善もまた当時の文化に重要な一役をかったと云わなければならぬであろう。

尤も彼らが初め丸善を利用したのは、洋書の購入のみにしぼられていた。然し志賀直哉の如きはその利用法に変った手法を案出している。その著「廿代一面」にこう云う文章がある。

……金がなくなると神田の知ってゐる古本屋で一番高く買ひ取る書名を聴いては丸善と

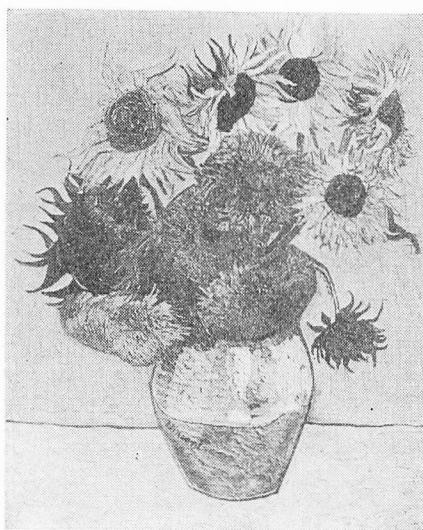


武者小路実篤

か中西屋でその新しい本を買ひ、俵で運んで金に換えた。丸善や中西屋は自家へ払ひを取りに行くから幾らでも本を渡して呉れた。

もともと丸善は丸家銀行を經營したことがあったのだから、こういう風に金融機関として利用されても文句が云えないだろう。そこへ行くとき武者小路実篤は真面目な方で、主として本を購求していたようである。「丸善の思ひ出」と題して「学鐙」昭和二十七年一月号に載せたもののうちから、抜書して見よう。

(略) レklamにないものは他の本屋の広告を見て、丸善を通して、ドイツに注文してもらって、それがくるのを待ち兼ねて読んだ。その時分、丸善には、僕達が「初さん」と呼んでゐた若い、気がきいた、要領のいい、親切な店員が居たので、この人にたのんで西洋からとってもらった。いろいろの本屋の広告を見てそれを西洋に注文して、とりよせて読むことは、はがゆくもあったが、楽しみでもあった。イブセンのものはレklamで大概よみ、メーテルリンクや、ドストエフスキーや、ストリンドベリーのものはドイツで出てゐる全集を、一度に買へない時は分冊で買った。その他、宗教的な本や、社会的な本や、哲学者のことがかいてある本など、とりよせてもらって読んだ。



ゴッホ「向日葵」

まことに武者小路は代表的な勤勉学生であり、篤学の士であった。だが彼と丸善との交流は此の程度では止まっていなかった。武者小路は文学愛好者であると同時に美術愛好者でもあった。彼が最初に興味をおぼえたのが、印象派の画風で、殊に未見のゴッホに対する興味からであった。「白樺」に有島生馬や児島喜久雄という画家や、美術に委しい柳宗悦などがいたから、彼もその影響を受けて西洋美術に対するあこがれを憶えたものであろう。ゴッホに接近するようになった次第について、「学燈」昭和二十八年六月号二〇頁以下に、「ヴァン・ゴッホ生誕百年祭にあたって」と云う標題で、中村研一（洋画家）、式場隆三郎（医博）、土岐善麿（文博）と四人で座談会を開き、その時彼は次のように語っている。大いに味うべきものがあるので、いさゝか長い文章だが、こゝに摘記して見よう。

偶然といふのか、ドイツの絵の芸術雑誌をとって見たら、ドイツの若い絵かきがゴッホの影響を非常に受けているということが出ていた。しかし、ゴッホの絵は見えていないし、名前だけではどういふ影響を与えたか分らなかった。そのころ僕は何でも新しいものを求めるという時だったので、知りたいという気持が強かった。そこで、丸善の初っさんと僕達と呼んでいた人に頼んで、丸善を通して西洋から印象派というドイツ

の本をとった。その口絵に、ゴッホの絵の複製が一枚入っていて、初めてゴッホはこういう絵かきなのか、ということを知った。その時分柳がとっていたカタログを見て僕達が見たく思っている人々の画の複製を丸善を通して注文したのが柳の家にとどいたので、僕達は早速柳の家に出かけた。その複製の内にゴッホが十枚位あったと思うが、その一つ一つが僕達を興奮させた。岸田劉生もその時その席にいた。僕が岸田にあったのはその時が始めてだった。それから二、三年たつて或る夜僕は白樺美術館をつくりたいと云う空想をし興奮し、翌る日に早速柳とか志賀に話したら、二人とも賛成で、寄付を募り、その寄付も十円ぐらいが多かったが、それでも六千何百円が集った。それでセザンヌかゴッホを買いたい。そういうことをぼくが書いたら、それに対して、ちょうど作曲の研究にバリへ行く相馬と言う人があって、もし白樺美術館で絵を買うなら、自分がその方に骨を折りたい、という手紙を寄こした。それから間もなくして、大正三年だったか、こういうものが売りに出ているが買わないかという手紙が来た。ゴッホの向日葵と雨の景色の二つの写真を寄こして両方とも日本の金で二万円だという。白樺美術館ではとても買えないので、友人の山本願弥太男にすゝめた。又その時同じく二万円でセザンヌの自画像が買えると言うので同級生の細川護立にすゝめた。二人とも即座に承知した。白樺の方は六千何円でセザンヌの風景を買った。仲々いゝものだ但未完成品だった。そんなことで、初めて本物が日本に入ったわけだ――

こうして極く少数であったが本物に対面することが出来た彼らの喜びは譬えようもなかった程であった。そしてこれというのも丸善が間接に仲介をした結果であり、武者小路の文中、度々出てくる丸善の番頭「初っさん」のお

[illegible]

「学鐙」に広告された美術書



「学鑑」に広告された美術書

更にかくも因縁浅からぬ丸善との関係を詳細に、盟主武者小路実篤の口から直接聞きたかったので、訪問採取のため、昭和四十二年五月十七日、八木佐吉本の図書館長、社史編纂室員達と共に仙川^{せんかう}の私邸を訪問した。車は甲州街道を西進し、京王電鉄仙川駅前通りで左折し、軒並せまった商店街を抜け、ようやく住宅街に入って間もなく、武者小路の門前にとまった。門をくぐってだらだら坂を下ると民芸風の本屋に達した。間口の広い玄関には重厚感があふれており、案内を乞うと古風な作業衣姿の主人自らが応対に出てきた。つい今しがたまで画筆を握っていた様子である。広い応接間に通され、彼と対座し、来意を告げて直ちに質問に入った。話の順序として白樺派の主張や、つづいてトルストイより受けた影響など聞いて見るが多くを語らない。然し話が進んで「新らしき村」のことになると、ようやく力がこもって来る。八十幾歳の人とは思えぬ位に熱っぽい口調で、在りし日の夢をおうかのように、やゝ話しくい調子だが雄弁に語り出す。しばらくその話を聞いた後、主題の丸善との関係や、洋画紹介のいきさつなどを聞いて見たが、「学鑑」所載の記事や、座談会での話と大差がない。対談凡そ二時間、長居^{ながい}を謝して辞去すると、どこからか四十雀や藪鶯のさえずる声が聞えて来た。

結局この訪問では已に述べられた点を、再確認したに止まった。しかし白樺派の盟主としての彼の活動は、「新

らしき村」ならぬ新しい大正文化をつくったと云えるし、丸善は彼らと一体になり、新時代の文化昂揚に貢献したものと云えよう。特に泰西美術の紹介について、彼らがヨーロッパ近代美術へ如何に情熱を傾けていたかは、「白樺」の大正八年三月号に出た次号予告を見るだけで充分であろう。即ち

挿絵の方は今迄白樺で出して来た人達の中の二十一人の芸術家の作品を一つ宛と、外に文学者の肖像を十二人だけ入れることにした。絵画及び彫刻の方はフランク・ジェリコとデューラーとゴッホの三人のものを着色版にし、其他ジオット、マンテナ、ボッチチエリ、レオナルド、ミケランジェロ、ティントレット、ドナテロ、ファンアイク、グレコ、ルーベンス、レムブラント、ブレーク、ゴヤ、ドラクロア、ミレー、シャヴァンヌ、セザンヌ、ロダンの十八人と、肖像ではワグネル、ベルリオ、ヘッベル、ユーゴー、イブセン、ホイットマン、ドストエフスキー、トルストイ、ストリンドベルヒ、ヴェルハアレン、メーテルリンク、ロマン・ロランの十二人の予定になつてゐる——と。

これに対し丸善が輸入した洋画関係書籍を、「学燈」所載の広告文からその主要なものを挙げて見ると次の通りである。

年 月	著 者	書 名	原 著 者 及 書 籍 名
大正 元年九月	レウイス・ハイन्द V・ピカ J・M・グレーフェ	後期印象派 フランス後期印象派 印象派	C. Lewis Hind-The Post Impressionist V. Pica-Impressionist Française J. M. Graefe-Impressionisten

元年十月	J・W・ワイバツハ	印象派	V. W. Weibach-Impressionismus
	J・M・グレーフエ	オーギュスト・ルノアール	J. M. Graefe-Auguste Renoir
	J・M・グレーフエ	ポール・セザンヌ	J. M. Graefe-Paul Cezanne
		ヴイセント・バン・ゴッホの思い出	Personaliche Erinnerungen an Vincent Van Gogh
元年十月	G・H・ヒール	フランス美術選集	Art Française
	R・C・ウイトル	彫刻百選	G. F. Hiel-One Hundred Masterpieces of Sculpture
		絵画百選	R. C. Wilt-One Hundred Masterpieces of Painting
	J・M・グレーフエ	ヴイセント・バン・ゴッホ	J. M. Graefe-Vincent Van Gogh
元年十一月		ターナー水彩画	Turner's Water-Colours at Farnley Hall
	H・R・プール	美術の新傾向	H. R. Poore-The New Tendency in Art
	マッペ	ポール・モーギュアン	Mappe-Paul Gauguin
	マッペ	ポール・セザンヌ	Mappe-Paul Cezanne
二年九月	マッペ	ヴァン・ゴッホ	Mappe-Van Gogh
	ジェームス・ハネー	印象派人	James Huneker-Promenades of an Impressionist
	カー		
	バーヂ・ハリソン	風景画	Birge Harrison-Landscape Painting
二年十月	W・J・リードレイ	美術・画家・風景画	Wm. J. Laidlay-Art, Artists and Landscape

Painting		Die Kunst	
芸術		Art: August Rodin	
オーギュスト・ロダン		A. Rodin-Venus. To the Venus of Melos	
ヴィナス		Leonce Benedite-Gustane Courbet	
グースタン・クールルバー		Andre Michel-Puvis de Chavannes	
プビ・ド・シャバンヌ		Kurt Bertels-Francisco Goya	
フランシスコ・ゴヤ		J. M. Graefe-Camille Corot	
カシユ・コロ		J. M. Graefe-Edouard Manet	
エヂュアリー・マネ		C. J. Holmes-Notes on the Post-Impressionist Painters	
後期印象派家論		Second Post-Impressionist	
第二次後期印象派		Max Raphael-Von Monet zu Picasso	
モネーからピカソまで		The Landscapes of Corot	
コロの風景画		Arthur Jerome Eddy-Cubists & Post-Impressionism	
立体派と後期印象派		Rembrandt	
レンブラント		K. J. Konody-Filippino Lippi	
フィリッピノ・リッピ		Meynell-Giovanni Bellini	
ジョバンニ・ベリニ			
マイエル			
K・J・コノデイ			
三年十一月			
三年十月			
三年五月			
三年二月			
三年一月			
二年十一月			

三年十二月	ユー・ストックス	ゴツツォリ	Hugh Stockes-Gozzoli
四年一月	アーサー夫人	ポーロ・ペロネーズ	Mrs. Arthur-Paolo Veronese
四年二月	J・カートライト	ムニエル	Munier
四年六月	J・カートライト	ボッチェリ	J. Cartwright-Botticelli
四年七月	J・カートライト	ラファイエル	J. Cartwright-Raphael
四年九月	ベルンハイム・デューン	ドガ	Degas
四年十一月	L・デイミエ C・H・カヒン	セザンヌ バンダイクの線画 フランス絵画史 近代画家論	Bernheim Jeune-Cezanne Etching by Van Dyck L. Dimier-Histoire de la Peinture Francaise C. H. Caffin-How to Study the Modern Painters

この表と前述の「白樺」の予告表と対照して見れば、どう云う書物を一般に知らしめ、読ましめんとしたかわかるが、その購入のいきさつは、或いは白樺派の人々のアドバイスによって丸善が輸入したのもあり、また丸善が自主的に選定して輸入したものもあるだろう。

元社員斎藤哲郎の談話によると、仕入書籍選定の結果を最終的に決定したのは、所謂三部会と云われた荒川実、山崎民雄、田中二郎の三人であった。尤もそれには助手格のものが、予め洋書カタログからこれと思うものを数十種選定しておいて審議の準備をしていた。例えば工学書は田中二郎、文学書は内田魯庵、ドイツ・フランスの語学

書は栗本發未、雜誌は荒川実というように。画集、画論にはこうした下選りをするものがなかったから、直接三部会がカタログによって選出した。

いずれにしても以上述べたように、「白樺」と丸善とは断ち切れないつき合いで協力し、わが国大正文化の担い手となって、それを推進して行った点では、両者共偉大な貢献者と云わなければならないだろう。